[概要]

本研究は富山競輪場内で形成される「ギャンブル空間」について検討し，富山競輪の愛好者はどのような人々で，その実施地域である富山競輪場はどのような歴史を持ち，現在ではその周辺でどのような現象が生起しているのかを明らかにした．富山市が競輪場建設を検討し始めたきっかけは1945年の富山大空襲による戦災からの復興財源を公営ギャンブルにより確保しようとしたことである．富山競輪場は場外の周辺地域に飲食店などがなく，空間的広がりが見られない．これは建設の際に遊休工場敷地であった岩瀬池田町が使用されたことや，規模の面から考えて外部に空間的広がりを持たせる必要がなかったためであると考えられる．後にその周辺にごみ処理施設や火葬場といった，いわゆる迷惑施設が建設されたことで岩瀬池田町は，居住空間としての空間的側面を持っていない異質な空間を生み出すこととなった．また，競輪場には巨大無料駐車場や，極めて近くに富山ライトレールの最寄り駅があり，競輪場の訪問者は直接競輪場にアクセスすることが可能なうえ，場内店舗等も数多く設置されているため，一度競輪場に入ると帰るまでは競輪場の外に出る必要はない．そのため，富山競輪場内で形成される「ギャンブル空間」には外部への広がりは見られない．一方，アンケート調査から得られた回答から，富山競輪の愛好者は大半が 60 歳を超える男性であり，最初は一人で競輪場を訪れ，競輪場外での人間関係が持ち込まれることもあるが，そこから新たな人間関係が構成されることもあるということが分かった．しかし，一人で競輪場を訪れる場合，場内で友人を作る例は多くなく，現在では有料施設を利用するかどうかなどによる人間関係の差異が生まれるという現象が生起していた．彼らは，家庭内で居場所を得られないなどといった要因から，行き先を求めた結果競輪場を選択し，そこで自分の居場所を獲得するため競輪というギャンブル行為に参加し，自らの財を支払うことによって快適な空間を手に入れている．富山競輪場で形成される「ギャンブル空間」は，彼らが居場所を確保するための重要な役割を担っている．